

# モンスーン気候を駆動する 独立な二つのリズム



## 中川 毅 教授

立命館大学

聴講自由  
登録不要

日時

平成29年4月27日(木)

16:00~17:15

場所

筑波大学総合研究棟A110(公開講義室)

使用  
言語

日本語



要旨:

ミランコビッチ理論とモンスーン気候をつなぐ古典的な理論としては、中国のレス・古土壌の研究が世界的に知られている。この分野は劉東生 (Liu Tungsheng) の卓越したリーダーシップのもと、1980年代から急速に発展し、

- 氷期=乾燥(=夏モンスーンの弱化)、
- 間氷期=湿潤(=夏モンスーンの強化)

という比較的単純なパターンを、多くの研究者の脳裏に深く印象づけた。

これに対し、2000年代初頭から台頭の著しい、汪永進 (Wang Yongjing) を筆頭とする鍾乳石の研究グループは、夏モンスーンの強度は氷期・間氷期サイクル(10万年周期)には対応せず、むしろ地軸の歳差運動周期(2万3000年周期)に支配されると報告している。

これら二つの立場はあまりにもかけ離れているため、建設的な融合は難しいように見える。では、どちらが正しいのだろう。

今回のセミナーでは、琵琶湖の堆積物に含まれる花粉化石を用いた研究で、この謎解きに挑む。



- TXつくば駅からバス15分(270円)  
6番乗り場「筑波大学循環」または「筑波大学中央行」乗車
- バス停「筑波大学中央」下車すぐ

問い合わせ  
植田宏昭(生命環境系)

Ueda.hiroaki.gm@u.tsukuba.ac.jp